



Title	フォワールの変遷：定期市から遊園地へ II 19世紀中葉から20世紀初頭まで
Author(s)	中村, 啓佑
Citation	Gallia. 2022, 61, p. 85-95
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/87601
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

フォワールの変遷 — 定期市から遊園地へ

II 19 世紀中葉から 20 世紀初頭まで

中村 啓佑

半世紀前の春、留学先に突然現われた仮設の遊園地 «foire» と、当時筆者の頭の中にあった定期市 *foire* が、どこでどうつながるのか、言い換えれば、「商いの場が、一体どのようにして遊びの場へ変化したのか」という素朴な疑問が本論の出発点であった。前編 I¹⁾ で明らかになったのは、元々は定期市の客寄せであったアトラクションが次第に発展し、商品売買にとって変わるといふ、いわば主客転倒の経緯である。そしてその主たる原因が、産業革命をきっかけとする都市住民の経済環境と生活様式の変化にあること、また、そうした変化にともなう、19 世紀前半にはフォラン社会にも構造的変化の見られることがわかってきた。

それに対して後編である本稿 II では、純然たる娯楽の場となった 19 世紀後半以降のフォワールについて、内からはフォラン社会の格差増大の原因を探り、外からはスペクタクルの盛衰を概観したい。第 1 章では、フォワールの盛況にともなう富裕層と一般層との懸隔が広がり、二つの階層の組織化が進行する過程を追う。第 2 章と第 3 章は相俟って、19 世紀後半から 20 世紀前半にかけての、パリのフォワール繁栄を展望する。第 2 章が、フォワールの空間的特性を明らかにしつつ、フォランとビジターの関係を描き出すのに対して、第 3 章では、ショーの代表格であるメナジュリ（動物ショー）と小規模見世物を対比し、それぞれの特徴をとらえることによってフォワールの変化を浮彫りにしたい。

第 1 章 フォラン社会における格差の増大

「はるか昔から『フォラン (*forain*)』という語が意味するのは、まぎれもなく独自の生活様式であり、独特の文化である。フォランたちは、板木やら生活用品やらを荷馬車に積みこんで列をなして移動していく。家族ぐるみで、今日はこの町、明日はあの町と、フォワールの開催時期に合わせて²⁾。」

これが何世紀にもわたって定着したフォランの姿である。しかし、現実には動いておりフォランも時代とともに変化していく。本章では、19 世紀後半に顕著となったフォラン社会の格差に注目し、それがどのように生じ、どのように拡大したの

1) 中村啓佑「フォワールの変遷 — 定期市から遊園地へ I 19 世紀中葉まで」

『GALLIA』No.60, 2021, p. 13-21.

2) Université libre de Saint-Germain-en-Laye et sa région, *La Fête des Loges à Saint-Germain-en-Laye, 1800-1914*, Les Presses Franciliennes 2013, p. 103.

かを見ていきたい。

二つの階層 まず、フォワールで軽業芸を見せる *saltimbanque* ないし *banquiste* たちはどうなったであろうか。*De la Foire au Pain d'Épice à la Foire du Trône* は次のように語っている。

「18 世紀、それに 19 世紀の初めには、フォーブール・サントノレでフォランに割り当てられた土地はかなり限られたものであって、芸人たちの姿だけが目についたはずである。軽業師は戸外で、敷物の上で技を披露したのであり、動物遣いや手品師も大同小異であった³⁾。」

同書は次のように続ける。1860 年頃、バン・デピスのフォワール⁴⁾に大物経営者が登場する。トロヌ広場やヴァンセンヌ大通りでは、見物人の増加につれてフォランは比較的広い用地を利用できるようになり、目先の利く大物たちは、種々のアトラクション（奇術、アクロバット、メナジュリ〈動物ショー〉等）を一つの場所に集め、何百人も収容できるような、快適な小屋をいくつも配置することにした。そうした大物の例として二つのサーカスの団長、Adrien Derille と Emile Cocherie、メナジュリの 3 人の所有者、Bidel, Pezon, Pianet を挙げている。

さらに、*La Fête foraine d'autrefois : les Années 1900*⁵⁾によると次のようになるであろうか。19 世紀中葉まで、一部の例外を除いてバンキスト⁶⁾の暮らしは楽ではなかった。ところが、1880 年代に入るとフォワールの人気が爆発し、「大物」と「雑魚」の二つの階層にハッキリ分かれた。大物とは、劇場、サーカス、動物ショー、格闘技場、豪奢なメリーゴーランドなどの所有者であり、金のうなる連中である。飴屋、ブランコ設営業者、射的屋、籤の屋台、見世物小屋の経営者など、一台の車でしか稼げない連中が激しく嫉妬したのは言うまでもない。

それでは、嫉妬の対象となった大物の生活とはどのようなものであったのか。大物中の大物、先に名の上がった猛獣王ビデルのくらしぶりを見よう。Charles de Bussy は、ビデルは移動するとき、猛獣用の檻を満載した 40 両の車を従えていたと言い、さらに 8 両からなる居住用車の豪華さを次のように語っている。

「猛獣使いの王者ビデルは、特別豪華な車の一つを食堂にしていた。部屋は彫刻をほどこした樫の木で出来ていて、年代ものの陶磁器や貴重な絵画で飾られていた。地面から上がるには、真鍮の手すりのついた細身の階段を使う。

3) Agnès Rosolen, *De la Foire au Pain d'Épice à la Foire du Trône*, Editions L.M., 1985, p.34.

4) «Foire au pain d'épice» (後の«Foire du Trône»)は、19 世紀には、Place du Trône (現在の place de la Nation, 12 区)を中心に発展し、Trône 大通り、Vincennes 大通りと西へ広がっていった。同フォワールは 1965 年にヴァンセンヌの森に移され現在に至っている。

5) Christiane Py et Cécile Ferenczi, *La Fête foraine d'autrefois : les Années 1900*, la Manufacture, 1987.

6) *banquiste* の原義は「軽業師」であるが、次第に意味を広げ、*forain* 一般の意味でも用いられるようになっていく。ここでは広義の用法。

別の車は家族たち専用の寝室、また別の車は召使たちに、また一つは猛獣の世話係や猛獣遣いにあてられている。なかでもいちばん金のかかった車は、長いデスクを備えたサロンを兼ねており、そこで客を迎えるのだ。おらが町にぜひビッグなケルメス⁷⁾を呼びたいとやって来たお偉方を⁸⁾。」

各階層の組織化 1880年代にフォワールとサーカスの世界をレポートした Hugues Le Roux は、「今日では、フォランの社会にも富める者と貧しき者があり、二つの党派に分かれ激しく対立しているのは他の社会と変わるところはない⁹⁾」と述べている。最初に結集したのは貧しい階層であり、1883年「Chambre des Voyageurs forains（移動労働者フォラン組合）」が結成され、同年5月1日に機関紙 *Voyageur forain* が発行されている。ページの上部には、「移動労働者フォラン組合は、貧しき者であれ、富める者であれ、大衆を啓蒙し、喜びを与え、商品販売にあたるなど、まっとうに生計を立てる者すべてを歓迎する」という綱領を掲げている。

一方大物たち、すなわち「industriels forains（フォワールの施設経営者）」の中でも、先に見たような大規模な施設のオーナーたちは、自分たちの利益を守り、市当局と良好な関係を結び、円滑な興業や老後の生活を保証できるように、「l'Union mutuelle（相互扶助組合）」を1887年に設立し、同名の新聞を発行したと、ル・ルーは伝えている¹⁰⁾。組合の筆頭責任者は、もちろん先の猛獣王ビデルである。

それぞれの新聞はいずれも、どこで、どの程度の規模でフォワールが開催されるか、フォワールに対する住民の好感度はどんなものか、また、どの道が便利かなどを詳しく伝え、組合員の便宜をはかっている。ただ気になるのは、先の *La Fête foraine d'autrefois : les Années 1900* は、大規模経営者の方が先に「l'Union syndicale des industriels forains（フォワール経営者組合）」を結成したと書いていることである¹¹⁾。いずれが正しいのか判断する資料を持ち合わせていないが、1880年代に格差が増大して、利益の相反する二つの階級が組織を結成し、それぞれの主張を社会にアピールするようになったことは確かである。

いずれにしても、本章を締め括るにあたって次のようには言えるであろう。前編第4章で触れたことと本章での考察を繋ぎ合わせれば、1840年代、メリーゴーランドなどの機械装置やスタンドなどの所有者「industriel forain」とそうでないものに分かれ、1860年代には、大きな用地を割り当てられ、芸人をひとくりにして雇う者とそこに雇われる者の差が顕著となる。さらに1880年代、フォワールが急成長するところには「大物」と「雑魚」、すなわち、大興業主と小興業主の懸隔が

7) *kermesse* オランダ、ベルギー、北フランスで開かれる、有名な年次のフォワール。

8) Charles de Bussy, *Les Forains à travers les Âges*, Editions de «L'Intermédiaire Forain», 1930, p. 105-106.

9) Hugues Le Roux, *Les Jeux du Cirque et la Vie foraine*, Plon, 1889, p.18. Gallica.
<https://gallica.bnf.fr/ark:/12148/bpt6k204571t> (2021年8月25日)

10) 同書 p. 18-19.

11) 前掲書 *La Fête foraine d'autrefois : les Années 1900*, p. 30.

一挙に拡大したということである。

それでは、1880年代に始まるフォワールの最盛期とはどのようなものであったのか。パリを中心にその実態を描き出すのが、次に控えた二つの章の役割である。

第2章 フォワールの空間的特性 — フォワールの吸引力と民衆

これまでは、もっぱら時間軸に沿ってフォワールを説明してきたが、空間上の説明、すなわち、フォワールとはどのような場所であるのかについては、ほとんど触れる機会がなかった。本章では、空間的特性を明らかにすることによって、19世紀後半から20世紀にかけてのフォワールに具体的なイメージを与え、フォアンと、フォワールを訪れる人たちとの関係を見て行きたい。

フォワールのスペースと二つの特性 フォワールが宗教上の行事であった時代には、教会所有の土地、あるいは、教会が王や有力貴族から貸与された（一時的にせよ、恒久的にせよ）土地を利用して開かれていた。しかしフランス革命以後は、基本的に「*municipalité*（市町村当局）」管理の土地を利用している。具体的には、広場、公園、大通りなどの公共の場所、すなわち、ふだん住民が使用している一画で開催される。

ちなみに *La Fête foraine d'autrefois : les Années 1900* は、4月に始まり11月に終わるパリのフォワール暦に言及し、パリ市内と近郊のフォワールを10カ所挙げているが¹²⁾、本稿では、バン・デビスのフォワール（後のトロヌのフォワール）¹³⁾、ヌイーイのフォワール¹⁴⁾、それに、サン・ジェルマン・アン・レイのロージュのフォワール¹⁵⁾の三つを念頭に話を進め、必要な場合には場所を特定する。この三つはもっとも賑わったフォワールであり、資料が比較的豊富だからである。ちなみに、ロージュのフォワールの記録によると、1893年には、10日間に約10万人が訪れたとある。サン・ジェルマン・アン・レイでこの賑わいであるから、パリ市内フォワールの人出が想像されよう。

フォワールが公共の場所を利用して開かれているという事実から、二つの特性が導き出される。一つは、空間上の問題、すなわち、フォワールが使用している土地は、普段一般住民が使用する場所であるから、開催期間中はその場所を囲い、特別な場所（祭りの場所）である象徴的な目印を付ける必要がある。この目印について、カイヨワが的確に表現するばかりか、フォワールの雰囲気そのものを見事に要約しているので紹介する。

12) 前掲書 *La Fête foraine d'autrefois : les Années 1900*, p. 27.

13) 注4)を参照

14) パリの北東部に位置する Neuilly-sur-Seine で開かれたフォワール。凱旋門から東北東に延びる Avenue de Neuilly（今日の Avenue de la Grande Armée）の下手で6月に開かれた。Fête à Neu-Neu の愛称で呼ばれ、西の La Foire du Trône と人気を二分したが、Avenue de Neuilly の拡張工事を理由に1935年、惜しまれつつ廃止された。

15) パリ郊外 Saint-Germain-en-Lay の森で6月末から8月中旬まで開かれる。船や汽車を利用してパリから大挙して見物が押しかけた。もっとも古いフォワールの一つであり、女性客のモードに注目が集まることから、雰囲気と客層が想像される。なおビジターの数は、前掲書 *Fête des Loges à Saint-Germain-en-Laye, 1800-1914*, p. 49 によった。

「こうした区域は、遊び場の本質的特徴を示している。この区域を他の空間から隔離しているのは、門柱、花飾り、欄干、ネオン、マスト、旗その他さまざまな装飾であって、これは遠くからそれとわかる特殊空間の境界線なのである。事実この境界を超えると、日常生活の世界よりも不思議に濃密な世界がそこに展開される。すなわち興奮した騒々しい群衆、色と光の氾濫がある¹⁶⁾。」

民衆の多面性とフォランの客寄せ 二つ目は、ファワールにやってくる人々の多面性であり、それは一つ目の特性から導き出される。

囲われているとはいえ、そこは公共の土地であるから誰でも通る権利がある。そこに集う者は *passant* (通行人) であり、*promeneur* (遊歩者、散歩者) である。明確な目的がなければ *badaud* (野次馬) と呼ぶこともできよう。

しかしフォランにしてみれば、すべては潜在的 *client* (客) であって、可能性を現実に変化するために呼びこみに手をつくすのは言うまでもない。しかしまた、群衆がお祭り気分になっていることも確かである。「それに暗いブルヴァールとフォーブルを通り抜け、煌々と照らされた広場に足を踏み入れたとたん、こわばっていた人々の心はパッと花開いて、たちまち、あたりを包むお祭り気分に溶け込む。楽しむために来たんだもの、楽しまなくっちゃ。」と、馬車から降り立った女性達のところを、ル・ルーは巧みに描いている¹⁷⁾。

とは言え、フォワールに來た人たちが、すべての小屋に入り、すべての屋台で金を落とすわけではないから、フォランには彼等なりのストラテジーがあり、手練手管がある。なかでも、もっとも華やかで、もっとも群衆のところを躍らせるのはバラードであろう。

parade とは、いわゆるパレードではない。メナジュリ (動物ショー)、サーカス、格闘技ショー、演芸場など、規模の大きな興業施設の前に舞台を設けて繰り広げられる、短時間の客寄せショーである。フォワールの術語・隠語を説明した小事典は、この語を次のように説明している¹⁸⁾。「太鼓の音が響きわたり、呼びこみ隊の連中が声をそろえて叫ぶと、やがて音楽に合わせダンスがはじまる。」人だかり十分と見たところで登場するのが口八丁手八丁の呼びこみ師 (*bonisseur*) である。「彼はまず演目の一つずつ紹介し、居並ぶバラディスト (バラードに出ているスターたち) に、お得意芸を、しかも華々しくご披露するよう促す。」

しかし、そこまでは表芸である。口上の効果を高めるために呼びこみ師があてにしているのは、群衆の中にまぎれこませておいたサクラ (*baron*) の一隊である。サクラの役割は、呼びこみ師の、たとえば卑猥なことばに、いち早く反応して笑うこと。極めつけは、待ちきれないようにチケットを買いに走り群衆を誘い込む

16) ロジェ・カイヨワ『遊びと人間』多田道太郎・塚崎幹夫訳、講談社、1990、p. 221。

17) 前掲書 *Les Jeux du Cirque et la Vie foraine*, p. 28-29。

18) Zeev GOURARIER, *Il était une fois la Fête foraine... de A à Z, de 1850 à 1950*, éditions RMN, 1995, p. 135. 1995年9月18日から1996年1月14日までヴァレットで開かれた博覧会の記念出版物。

ことである¹⁹⁾。しかもパラードに出ている花形パラディストたちは、実際のショーに出て来るとは限らないと言うから奥は深い。

規模の小さい所では呼びこみだけのところもあろう。もっと小規模なものになると、通しで上演されているか、ものが始終陳列されているかであるから、客は一方の口から入って (*entrer*) もう一方の口から出てくる (*sortir*)。それで、業界では *entresort* (見世物小屋) と呼ばれている²⁰⁾。そういうところでも、呼びこみはそれなりに活躍する。

こうした大小のショーや見世物を一つのグループとすれば、二つ目のグループはまとめて *marchand* (小見世・小店) と呼ばれる人たちである。キャンディ、食べ物、雑貨を売る小店、籤や射的などで稼ぐ人たちがこれにあたる。彼等の小屋やテントは総称して *échoppe* (屋台、スタンド) と呼ばれている。

籤の屋台ではオーナーが声を張り上げて景気づける。綿菓子なら、あのフワフワに惹かれないこどもがいるだろうか。ギモーヴ (マシュマロ) やナンシイ・ベルガモットや *pomme d'amour* (愛のリンゴ=リンゴ飴) は色と形だけで十分目を惹く。クレープに至っては、あたりに漂う甘い匂いが呼びこんでくれる。ロージュのフォワールでは、有名な野外レストランが立ち並び、肉を焼く匂いを無視するのは、さぞ難しかったであろう²¹⁾。

三つ目のグループとして、占い師やスナップ写真家のような人たちがいるが、呼びこみの必要がないのは明らかである。

遊技機械の場合は、機械の姿と音楽、それに客が客を呼びこんでくれる。心を浮き立たせるフォワール・オルガン (*Limonaire*²²⁾ と呼ばれる) につれて回るメリーゴーランドでは、馬上のこどもの喜びと興奮が見ているこどもたちに伝染する。ウォーターシュートで降りて来る人たちの叫声は、どんな呼びこみにもまして眺める人たちのところを躍らせる。

パラードのように大掛かりな仕掛けから、単なる呼びこみ、色と形と香り、舌の記憶に訴える食べ物の吸引力、音楽と機械音に重なる歓声の効果等、客を呼ぶ方法は多様である。一方、恐怖や残酷さを刺激したり、欲望をくすぐる方法もあれば、好奇心に訴える場合もある。時代と共に興り、時代と共に廃れていくフォランの戦略を分析するのが次章の仕事である。

第3章 フォランのストラテジーと時代の変化

フォワールがパリ市民の生活を彩った 19 世紀末から 20 世紀初頭は、フランスが «Belle Époque» と呼ばれた時代であった。社会的・経済的安定の波に乗って、

19) 同書 p.29-30

20) 動詞 *entrer* と *sortir* を活かした訳語を、日本の見世物、盛り場関係の文献を調べたが見つからなかった。一般的には「見世物小屋」と訳されている。ただし興業場所としての小屋は、普通 *baraque* と呼ばれているので適切な訳語が欲しいところである。*entresort* については、次章で説明する。

21) 前掲書 *Fête des Loges à Saint-Germain-en-Laye 1800-1914*, p. 50-51.

22) *Orgue de barbarie* (手回しオルガン) を機械化、自動化したもの。*Limonaire* は、フランスの製作会社の名前。

人々がフォワールに押し寄せたのも当然と言えば当然であろう。フォランたちは、大衆の好奇心に対してどのような戦略をねり、大衆はそれにどう反応したのか、そして時代の中で何がどう変わっていったのかを、大規模なショーと見世物小屋という対蹠的な場で見ていきたい。

恐怖とスリル — 猛獣ショー 18世紀の«ménagerie²³⁾»は、珍しい動物を見せて巡回するか、動物どうしを闘わせるかの単純なものであったが、19世紀に入ると *dompteur* と呼ばれる猛獣遣いが登場し猛獣ショーが中心になった。最初は猛獣を手なづけて扱う性質のものであったが、1850年代フォワールに導入された頃から、何匹もの野獣を挑発し制圧することで盛り上がりを見せたと言われている。いずれにしても、興業主たちの目論見は見事にあたり、猛獣遣いという新しいスターの業と豪胆さに驚嘆すると同時に、恐怖と戦慄を共感しようと観衆はふくれあがった。かくして1860年から1890年にかけてメナジュリは全盛期を迎え、1880年代には絶頂に達する²⁴⁾。それは第1章で見たように、フォランの社会が分極化していった経緯そのものであり、猛獣王ビデルの莫大な富が蓄積されていった時代でもあった。

絵看板は、手なづけた野獣たちが突然牙を向いて飛びかかり、猛獣遣いは血みどろになるという刺激的なものであったし、呼びこみの方も、突発的反撃にあって傷ついた猛獣遣いの姿を、さもライブのように伝える等、ひたすら好奇心を煽るものであった。あるジャーナリストは「メナジュリに金を払っている客は、猛獣遣いが掛け値なしの危険にさらされていることを知っており、彼等を惹きつけるのは、まさにこの危険というご馳走なのだ²⁵⁾」と喝破している。

実際、1860年代の終わりごろまでは、命にかかわる事故は稀であったと言われている。しかし、1869年に犠牲者が出て以来、事故は頻繁に起こるようになり、そのたびに新聞は大々的に報道した。関係者は新聞が大げさに書き立てていると言うが、メナジュリが増えれば増えるほど事故は多発し、特に世紀末には頻繁に起こるようになった。そして、それがまた客を呼んだのである²⁶⁾。

しかしながら、20世紀に入るとメナジュリの興業にも陰りが見えはじめる。特に1920年代には、各地のフォワールをあれほど賑わした猛獣ショーもわずか十あまりと激減していた。追い打ちをかけるようにジャーナリズムが反対のキャンペーンを盛り上げる。その背景には、兼ねてから反対してきた住民の声があった。前章でも述べたように、フォワールが開かれるのは町中である。近隣住民にとって、野獣の匂いと咆哮は耐えがたいものであったし、何よりも危険と隣り合わせていたからだ。観客も、かつてのようにエキゾチスムを感じなくなっていた。オートバイ乗りや新手のアクロバットのようにスピード感のあるものが求められていた。

23) Iの第2章、注14)でも紹介したとおり、元々は王侯貴族が珍獣を鑑賞するための庭園であったが、18世紀に入ると種々の動物を見せる興業がはじまり、この名で呼ばれた。ただ、猛獣ショーが始まって、動物を見せるメナジュリが姿を消したわけではなく、サーカスに併設される場合、独自で巡業する場合があった。

24) 前掲書 *La Fête foraine d'autrefois : les Années 1900*, p. 185-186.

25) 1897年7月17日付 *Le monde illustré*、同書、p. 205

26) 同書 p. 207.

要するに、時代の好みは生き物から機械へと移ったのだ²⁷⁾。

好奇心のままに — 見せ物 メナジュリや格闘技ショーがフォワールにおけるビッグの代表とすれば、小規模経営を代表するのは、「*entresort*²⁸⁾」(見世物)である。「大きな小屋では常に出し物に手を加えてきた。より良いものを出そうと工夫してきたのである。それに対して見世物小屋は何一つ変わっていない。それも遙か昔から」とル・ルーは断じている²⁹⁾。

見世物小屋は今日の人権意識では考えられない世界であった。人権という概念がなかったはずはない。それを謳ったのはフランス革命だったのだから。しかしその場合「人」はヨーロッパ系白人であり、しかも彼らが「正常」と考える人であった。精神病院では、著名人が招かれて患者を観察したり、一般人が招かれて患者とパーティをする時代だったのである³⁰⁾。トロヌのフォワールに関する記事から引用するが、見世物小屋を正確に伝えるために、当時の用語を用いて訳すことにする。

「フォワールの小屋では、文字取り奇形の人たちが見物の対象となっていた。白皮症、全身多毛、二色の黒人、四肢のない男と女、極度に痩せた女と極度に太った女、巨人と小人³¹⁾。」

そればかりではない。世界の各地から原住民が連れて来られ「*sauvage* (野蛮人)」として供覧に付されていた。ロージュのフォワールに関する書の、次のような新聞記事(1869年4月31日 *L'Industriel*)を紹介する。

「[...]『入れ墨をした男』が扉を開いてくれる。彼は檻の中のニューカレドニアの原住民よろしく虎の皮をまとっていた。一方、小屋の奥の檻の中では、原住民が想像しうる限りの奇怪な様相で、叫び、わめいて空腹を訴えていた。彼は見物の目の前で生きたウサギを、歯をむき出して、むさぼり食らうのだ³²⁾。」

ニュー・カレドニアがフランスの植民地に組み入れられたのは、この記事の少し前(1853年)のことだと、同書は説明している。

もう一つ指摘すべきは、必ずしも事実を見せるとは限らないことである。大きく見せたり小さく見せたりする手品まがいのトリックが用いられていたし、雇った人々に色を塗って原住民に仕立て上げるようなインチキも行われていた。

当局は決して野放しにしていたわけでない。ロージュのフォワールに関して、

27) 前掲書 *La Fête foraine d'autrefois : les Années 1900*, p. 210.

28) 注 20) 参照。

29) 前掲書 *Les Jeux du Cirque et la Vie foraine*, p. 44.

30) ヤニク・リーバ『女性と狂気』和田ゆりえ・谷川多佳子訳、平凡社、1994.

31) 前掲書 *De la foire au pain d'épice à la foire du Trône*, p. 57.

32) 前掲書 *Fête des Loges à Saint-Germain-en-Laye 1800-1914*, p. 114-116.

サン・ジェルマン・アン・レイの市長モルティエが、1883年5月4日付けで次のような政令を出している。「公衆道徳ならびに良俗に反するすべてのアトラクションと見せ物を禁ずる³³⁾。」この政令の実行力がどれほどあったのかを確かめることはできないが、トロースのフォワールに関する記述は一つの参考にはなるだろう。

「パリの警視庁は、1906年の処罰令で『奇形、卑猥で醜惡なショー、いかなる形であれ女性を見せ物とすること、要するに、*entresort* と呼ばれるすべてのショー』を禁止の対象とした。[...]」

ロージュのフォワールでは、こうした見世物は流行遅れ、あるいは下品と考えられて姿を消したが、無頓着なトロースのフォワールでは、相変わらず奇態な見世物小屋が見られた。ただ、過去の見世物に比べれば罪のないものではあったが³⁴⁾。」

いずれにしても、時代を経て今日のフォワールでは、絶叫マシーンなどの機械が主流であり、当時の面影を残すのは、簾、フォワール特有のスイーツなど一部のスタンドだけになったことは事実である。

本章前半では、恐怖とスリルの織りなすドラマの場としてメナジュリを、後半では、現代では考えられないような見世物小屋を紹介した。ただ、これらがフォワールを代表しているわけではないことを確認しておく必要があろう。こどもたちが手に汗にぎったマリオネット、大人たちが涙を流したメロドラマの劇場、素人とプロの闘いに興奮した格闘技ショー、等身大の、実在の名人や歴史上人物に驚きの声をあげた蠟人形など楽しみはつきなかった。

前章でも見たように、それは、こどもから大人まで、労働者からプチブルジョワまでが待ち望む、音と光と歓声が交錯する娯楽の場であった。そこに集まる人々の大半は、庶民と呼ばれ大衆と呼ばれる人びとであった。彼等には、安い費用で遊べる場、日頃のうさを晴らす場が必要だったのである。筆者がいたずらにことばを費やすよりも、詩人の声に耳を傾けよう。

「いたるところに、休日の民衆が繰り出し、^{あふ}溢れ、楽しんでいた。[...]」

こういう日に民衆は、一切を、苦痛をも労働をも忘れてしまうように私には思われる。

子供と同じようになるのだ。小さい者たちにとっては、それは休みの一日であり、厭な学校が二十四時間先までおあずけになるということだ。大人たちにとっては、人生の^いもろもろの意地悪い権力との間に結ばれた休戦協定であり、世を^{あまね}遍くおおう緊張と闘争の中での一瞬の猶予だ。

「[...]」すべては光と、埃と、叫びと、歓びと、喧噪とばかりだった。金を使う者もあれば、^{もう}儲ける者もあって、そのどちらも等しく朗らかだった。子供た

33) 前掲書 *Fête des Loges à Saint-Germain-en-Laye 1800-1914*, p. 118.

34) 前掲書 *De la Foire au Pain d'Épice à la Foire du Trône*, p. 60.

ちは、母親の下袴^{ベチコート}にしがみついて棒砂糖をねだったり、なにか神のように眩^{まにぼ}い手妻使いをもっとよく見ようと父親の肩に乗ったりしていた。そしていたるところに、すべての香りを圧して、この祝祭のお香ともいうべき、揚げ物の匂いが漂っていた³⁵⁾。」

結論に代えて

前稿Ⅰでは、本来定期市であったフォワールが、産業革命のもたらした社会的・経済的变化によって、本来備えていた商業的機能が次第に影をひそめ、従であった見世物が主流となり、それに遊技機が加わって娯楽の場へと変化していく過程をたどった。

本稿Ⅱでは、純然たる娯楽の場と化したフォワール、特にパリのフォワールに焦点をあて、19世紀後半から20世紀初頭にかけての盛況がどのようなものであり、また、その間にどのように変化していったのかを記述しようとした。

第1章では、19世紀後半、フォワール内部の格差がさらに増大していく経過をたどり、その現象はまた、見物人の増大に起因するフォワールの敷地拡張を利用できた階層と、そうでない階層との差であることをつぎとめた。

ついで第2章では、パリの三つのフォワールを俯瞰し、喧噪と熱気を伝え、フォワールというワンダーランドの具体的なイメージをつかもうと努めた。第3章では、特徴的な二つの分野を取り上げ、時代の風潮とモラルにともなって移り変わるフォワール全盛期を描いた。19世紀後半から20世紀前半にかけてのフォワール全盛期は、いわば、過去の典型的フォワールが終焉し、新しいフォワールが始まる前触れであったと言える。

その後の、今日に至るまでの変化を次のように要約することができよう。人々の関心は、ショーや見世物という人間の業から、マシンがもたらすスピードとスリルへと移ったのだと。言い換えれば、見るという楽しみから、機械と一体化することでスピードと眩暈に酔う身体的快樂へ移ったのだと。

反省点はつきないが、主なものを列挙する。

まず、「産業革命がもたらした社会的・経済的变化によって、本来備えていた商業的機能が次第に影をひそめ、従であった見世物が主流となる」という指摘自体は、大筋において間違っていないものの、フランス革命による聖から俗への流れもかかわっていたのではないかと最近になって考えるようになった。

そこで、二つの問題が生じて来る。そもそもフォワールは教会主催の宗教行事であった。教会の力の及ぶ範囲が小さくなっていったとしても、その名残は18世紀末、フランス革命までは感じられたはずである。教会の役割、教会との関係が今後の課題として残る一方、フランス革命はフォワールに対して、どのような影響と変化をもたらしたのか。そうした観点から、あらためてパリのフォワールの歴史的变化を辿る必要があるだろう。

35) ボードレール『パリの憂鬱』、「14 年老いた大道芸人」、『ボードレール全集Ⅳ』、阿部良雄訳、筑摩書房、1987年、p. 31-32.

その他、紙数の関係で言及することができなかった問題も少なくない。

まず、前稿でフォワールとサーカスの関係について触れているが、両者の関係はサーカス誕生前も誕生後も、考えていたよりはるかに緊密であることがわかってきた。一章を用意し原稿を作成したが、論旨の一貫性を考えると削除せざるをえなかった。

写真やシネマを初めとする科学技術の普及・大衆化の動き、いわゆる *vulgarisation* の側面がフォワールにあることは承知しており、特にフォワールがシネマの発展に果たした役割について論じる予定であったが、紙数の関係で果たせなかった。

いずれにしても、フォワールという多様で変化に富んだ場の、近世から今日まで約 500 年を、二つの論文で一望しようとする企てそのものが無謀というべきであろう。各章で扱った複数のテーマも、上に列挙した問題も、それぞれが独立した論文となるべき性質のものである。それらすべてを掬い上げ発展させることができるかどうか心もとないのであるが、行きつくところまで行ってみたいと考えている。個人的思い出から出発した本論を個人的願望で終える³⁶⁾。

(追手門学院大学名誉教授)

36) 本論を執筆するにあたり、次の方々に多大のご助力をいただいたことを明記し、心から感謝の意を表したい。

数年にわたって文献を探し、パリから送ってくださった、宋英姫さん。

Web 図書の使い方などを根気よく教えてくださった、山本侑子さん。

文献渉猟にあたって頻繁にお手を煩わせた、由利江里子さん。

資料を贈呈してくださった、日高裕子さん。

本論の基調となる連続講演の機会を与えてくださった、伊川 徹さん。

ていねいにフランス語をなおしてくださった、Olivier BIRMANN さん。

再三にわたって原稿に目を通し、適切な助言をくださった、岩根 久さん。

引用資料についてご教示くださり、資料を提供くださった、北村 卓さん。

資料を提供し、編集作業をお手伝いくださった、萬代 宰さん。